

## 「平成 28 年度日臨技九州支部医学検査学会（第 51 回）の開催にあたって」



一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会  
代表理事会長 宮島 喜文

本学会が、一般社団法人佐賀県臨床検査技師会の堤 玲子学会長の下で、メインテーマを「極（きわめる）」～未来を拓く検査のヒカリ～として盛会に開催されますことを会員の皆様とともにお慶び申し上げます。

また、日頃から一般社団法人日本臨床衛生検査技師会（以下、日臨技と略す）の活動に、ご理解ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

我が国は 2025 年に超少子・高齢化のピークを迎え、医療や介護の需要が高まることから、さまざまな改革が進んでいる。特に医療においては「病院完結型」から「地域完結型」の医療供給体制の構築に向けて大きく舵がとられ、今後、都道府県単位での医療計画策定が進み各医療機関の病床機能の分化や在宅医療の確保が課題となってくる。

このような中、平成 26 年 6 月の第 168 回国会で成立した「医療介護総合確保推進法」で、チーム医療推進を図るために臨床検査技師等に関する法律（第二十条の二）に採血と並んで「検体採取」が、新たに医行為の一部が臨床検査技師の業務として認証されました。検体採取が可能となったことにより、患者に対して検査説明、検体採取、適正な検査、報告書の作成、検査結果の説明まで一連の検査業務を担い医師の診断に円滑に繋ぐ臨床検査技師に一日でも早く成らなくてはならない。具現化するものとしては、病棟検査技師や救急検査技師、在宅検査技師などと称されるものであり、これを確立するために、もはや、私たちは理論ではなく、実学として経験し、学ぶことの重要性を自覚し、周囲の理解を得る行動に移し、早速に第一歩を記す時期に来ているのではないか。

一方、科学技術の進歩は目覚ましく、第 4 次産業革命と言われるロボット化や人工知能が臨床検査の領域に導入されることも遠い将来ではないであろう。

これも私たちは視野に入れ、生涯教育を積んでいく必要があるが、日々においては実証データを分析し、常に客観的判断が下させる能力を身に着けることが必要であり、その舞台となる学会発表には大きな意義があります。本学会のメインテーマである「極（未来を拓く検査のヒカリ）」をテーマに進むべき方向性について考えていただくことは非常に有意義である。あわせて学術活動の更なる発展と日頃の研究成果を発表する場として参加される会員にとって実り多き学会であることを祈念申し上げます。

最後になりましたが、本学会を運営するにあたりご尽力をいただきました内田尚美実行委員長をはじめ、佐賀県臨床検査技師会の皆様に心より感謝申し上げます。